



## § 1. 「雑草イネ」対策：早期発見と迅速な対処

近年の水田では、雑草のヒエとは違うが、栽培イネともちょっと特徴が異なる「雑草イネ（栽培イネと同じ植物種だが、古代米とは異なる）」の被害が広がりつつあります。この「雑草イネ」は、出穂後極めて籾がこぼれて落ちやすく、独自に交配を繰り返し、水田環境に適応してきた強害雑草です。田んぼに生えた雑草イネは徹底的な防除を3～4年続けて行わないと、雑草イネをなくすことは困難になります、早期発見・防除が大切です。

### 【雑草イネの見分け方】

- 1) 出穂した穂の様子が植えたイネと違う。
- 2) 籾が落ちやすい。
- 3) 籾、玄米の様子が植えたイネと異なる。

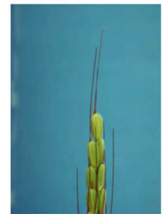
### 【雑草イネ発生の問題点】

- 1) 発生の発見が遅れ放置すると、3～4年で多発生状況になり、減収となります。
- 2) 農産物検査で雑草イネ玄米が混入していると着色粒となり、等級が下がります。
- 3) 農業機械を介して拡散すると、地域全体の水稻生産に被害が発生します。

### 【雑草イネを見つけたら】 <除草対策>

- 1) 雑草イネの種子脱落前から収穫前までの徹底防除。  
侵入初期の極小発生の場合には、籾が脱粒する前（出穂2週間以内）に株ごと抜き取り、圃場外で適正に処理する（水田近くに放置しない）。収穫前まで定期的に実施する、刈り取る場合にはその後の遅れ穂の発生に注意する。
- 2) 雑草イネ種子の拡散防止  
雑草イネが生えている水田の作業は、生えてない水田での作業後に行う。  
雑草イネ確認圃場での使用機械の作業後の洗浄を徹底する。
- 3) 収穫後の脱落種子の死滅促進  
収穫後は耕起せず、種子を露出させ、低温による死滅や鳥による摂食を期待する。
- 4) 翌年の栽培品目、栽培方法、作付時期の検討  
大豆、そば、もしくは野菜等の畑作物を作付し、耕起や攪拌による物理的枯殺、イネ科雑草に効果のある除草剤の処理で、雑草イネの発生を抑制する。  
直播栽培であれば、移植栽培に切り替え、雑草イネに有効な除草剤を使用する。  
雑草イネの発芽が揃う5月下旬以降に代掻きを行い物理的に枯殺、遅植えにする。
- 5) 除草剤の活用  
3剤除草体系で防除する。移植当日～翌日に初期剤を処理し、その後7～10日おきに一発処理剤および中期剤を処理する。薬剤の効果を切れ目なく発揮させ、遅発個体を枯殺する。雑草イネの農薬登録上の適用草種は「水田一年生雑草」ですが、「雑草イネ」に有効な使用時期は「雑草イネ発生まで」なので、注意が必要です。

(1) 出穂した穂の様子が植えたイネと違う

ふ先に色が  
ついている

芒がある

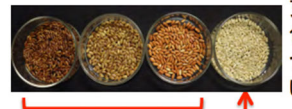
(2) 籾が落ちやすい

風などで  
籾が落ちる穂を一度  
握るだけで  
ほとんどの  
籾が落ちる

(3) 籾・玄米の様子が植えたイネと違う



コシヒカリ 雑草イネ

籾の色が  
黒い

雑草イネ玄米

コシヒカリ  
玄米玄米に  
色が  
ついて  
いる

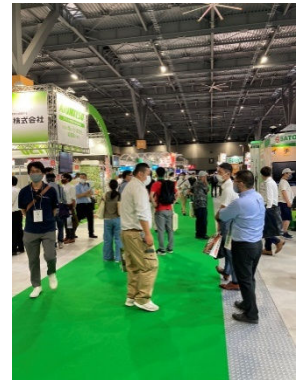
## § 2. 愛知 GPEC 開催について

昨年開催予定の日本施設園芸協会主催のGPECが、本年7月14～16日の3日間にわたり、愛知県常滑市のAichi SkyExpoで「施設園芸・植物工場展GPEC in 愛知・スマートアグリジャパン」として開催されました。



新型コロナウイルスの蔓延により1年延期されましたが、今回は6回目の開催で、中部地域では初めての開催、125団体が出展し、このうち初出展は30社、3日間を通しての来場者数は1万6千人と盛況でありました。弊社社員も、新商品、新技術の取得のために見学に行かせてもらいました。

今回は、スマート農業に関連のする出展が多く、IoT技術を利用した環境制御システムや農業機械、測定機械が多く発表されていきました。また、今年度農林水産省より発表された「みどりの食糧システム戦略」に沿った、SDGsに関連した2050年までのカーボンニュートラル（二酸化炭素の排出量実質ゼロ）に関連し、施設園芸における二酸化炭素の効果的な活用方法、環境負荷を低減する取り組み、生分解性フィルムの出展が多くありました。



また、次世代園芸ハウスとして、日本施設園芸協会が推進する「日本型大型モデルハウス実証・支援事業」が紹介されており、実際のハウスの仕様・生産方式をモデルハウスとして展示されていきました。ハウスの中には、栽培用の資機材や環境制御システムなども展示されており、次世代の園芸システムモデルが見られる良い機会となりました。その他にも、採光性の高いハウスや、細霧冷房を導入したシステム、災害に強いハウスや、ハウスの強化部材等の提案も多くありました。

期間中は、会場内でセミナー・シンポジウムも行われ、植物工場や総合環境制御、空調システムに関する講演が取りあげられ、出展者8社から製品・技術のプレゼンテーションが行われました。また、業界の最新動向や、収量増加・品質向上のヒントとなる全20セッションのセミナーも開講され、トマトやイチゴ、パプリカなどの事例紹介、植物工場の最新情報、統合環境制御やコンサルティングなどの発表がありました。そのほか、生産者の抱える課題やお悩みに答える「生産者相談コーナー」では、“補助金等” “栽培技術” “養液栽培・植物工場” “公庫・融資等”の4つのテーマで、専門家のアドバイスなどの説明もありました。



2年毎に開催されるGPECですが、時代の流れ、最先端技術を知ることができる展示会です。次回の開催も楽しみであります。